

研究調査報告—平成二十七～二十八年度

鶴見大学仏教文化研究所客員研究員 尾崎 正善

一、平成二十七年 滋賀県叡山文庫史料調査

はじめに

天台教学は、日本曹洞宗の思想背景として大きな影響がある。また、曹洞宗の法要・儀礼を考える上でも、中国禅宗だけでなくそれまでの日本仏教の伝統的行事・儀礼、つまり叡山における法会の影響も視野に入れて考えなければならぬ。

道元禪師をはじめとして多くの祖師方が学んだ天台教学、さらに日本仏教諸派との関連についての研究は、多くの研究者により様々な角度から参究されている。しかし、未だ充分に解明されたとはいえない。そうした中、天台教学、叡山仏教を研究するために、必須の史料を備えているのが叡山文庫である。叡山文庫は、その名が示す通り比叡山の書庫の役割を果たしている図書館であり、その蔵書数は、十一万冊余にのぼると言われる。

この図書館の特徴としては、原本の蔵書が中心のため貸出を行っていない。また、閲覧希望日を一週間以上前に事前に連絡し、来館当日は紹介状及び身分証明を持参しなければならないという規定もある。

そうした叡山文庫、さらに天台宗総合研究センター・天台宗典編纂所と当研究所が緊密な関係を築くことは、今後の研究の拡充のためには大変重要なことである。

今回は、叡山文庫の御厚意により叡山文庫の見学も含め、史料調査を行うこととなった。

一、調査概要

①日程 平成二十八年一月二十二日～二十三日

平成二十八年一月二十二日

横浜から京都經由で坂本に移動

十時から十五時まで、叡山文庫にて調査

大津泊

平成二十八年一月二十三日

日枝神社・三井寺（園城寺）拝観

京都經由で横浜への帰路に就く

②調査場所

滋賀県叡山文庫 滋賀県大津市坂本四―九―四五

③調査対象

叡山文庫所蔵天台関係諸典籍

A 施餓鬼法 （安永五年刊、叡山―眞如730）

（文久三年刊、叡山―普）

- B 羅漢講式 (叡山—池1395)
- C 達磨講式 (叡山—池1396)
- D 一向大乘寺規則並年中行事 (宝暦十一年、叡山)
- E 年中行事 (慶應元年十二月、叡山)
- F 『続高僧伝』 (刊本、三十卷)

④参加者

木村清孝・下室覚道・尾崎正善・池麗梅・興津香織

二、調査成果

叡山関係の原資料を直接手にして調査できたことが、何よりの成果といえよう。

また叡山学院坂本廣博教授に依る説明と意見交換の場を持つこともできた。今後の研究活動の足掛かりとなる調査であったといえる。

おわりに

以上のように、天台系の史料を通して禅思想や儀礼・法要の研究をおこなうことは、宗門関係の諸課題を参究する上で今後増えて行くのではなからうか。さらに、そうした研究を進めて行く上では、既に活字化された資料だけではなく、未発表・未整理の原史料を対象にした研究も益々大切なこととなるであろう。

そうした点も踏まえ、今後も関係する図書館・資料館との交流・調査を密に行きたい。

一、平成二十八年年度 石川県龍門寺・永光寺所蔵『伝光録』調査

はじめに

当研究所は、伝光録研究会を立ち上げ三年にわたり『伝光録』の諸本対校翻刻作業を行っている。これは、『伝光録』のより古い形態の解明と写本の系統を明らかにすることを目的とするものである。その結果は、『鶴見大学仏教文化研究所共同研究成果報告書・瑩山禅師『伝光録』―諸本の翻刻と比較―』（一）（二）として発表されている。その翻刻作業において使用しているデータは、曹洞宗文化財調査委員会で撮影したもので、マイクロフィルムからの転写であるためモノクロの状態である。そのため、汚れ・破れ・虫損、さらに後筆・朱筆等の判別が困難な箇所が多数存する。

研究会においてこの問題を解決するためには、原本の閲覧・撮影が不可欠であるとの意見が出された。

そうした研究会の要望を踏まえ、この度石川県龍門寺・永光寺の史料調査を行うこととなったのである。その成果は、今後の報告書に大きく反映されて行くものと考えている。

最後に、翻刻作業においてこれまで生じていた様々な疑問点が、カラー史料を確認することにより一見しただけで氷解したことを付記しておく。

一、調査概要

①日程 平成二十八年九月十一日～十三日

平成二十八年九月十一日

横浜から金沢に移動し、大乘寺拝観。金沢泊。

平成二十八年九月十二日

金沢から石川県立七尾美術館に移動

九時から十二時まで、『伝光録』の撮影・調査

七尾市内の龍門寺拝登

富山県高岡市に移動し、国宝瑞竜寺を拝登（四津谷*師の案内を受ける）
羽咋泊。

平成二十八年九月十三日

羽咋市内、永光寺に移動

九時から十二時まで、『伝光録』の撮影、山内拝観

金沢駅に戻り、横浜への帰路に就く

② 調査場所

石川県立七尾美術館（龍門寺史料）（石川県七尾市小丸山台二―二）

羽咋市永光寺（石川県羽咋市酒井町イ部一―番）

③ 調査対象

龍門寺本『伝光録』・永光寺本『伝光録』

④参加者

木村清孝・下室覚道・尾崎正善・池麗梅・古瀬珠水・横山龍顕

二、調査成果

①龍門寺本『伝光録』

『伝光録』五巻五冊の調査及び撮影。さらに、『仏祖悟則』（宗門伝燈之秘録）の撮影と『正法眼蔵』の確認作業も同時に行った。

龍門寺本『伝光録』は、石川県七尾市小島町・瑞雲山龍門寺所蔵の史料であるが、現在は石川県立七尾美術館に寄託されている。県指定文化財である。『伝光録』と『正法眼蔵』は、共に龍門寺第三世詰叡芳賢（一五五一）が前住地である能州興徳寺（現、廃寺）において、天文十六年（一五四七）に書写したものである。（『仏祖悟則』一冊のみは、賢佐和尚が弘治二年（一五五六）に書したもので、『伝光録』・『正法眼蔵』とは書写者と時代が異なる）なお、三本とも同一の表装仕立てとなっている。

これらの点に関しては、『永平正法眼蔵蒐書大成』「総目録」解題（一二〇頁）において既に指摘されるところである。

なお、『伝光録』・『正法眼蔵』・『仏祖悟則』は、永禄十年（一五六七）に興徳寺住持、徳岩春播（一五九二）が新調した一つの箱に収められている。（この箱も県指定文化財）

この箱書きに、書写の経緯と芳賢に関する記述があるので、その全文を載せておく。

永禄十丁卯季二月十三日、此箱春播置之

能州鳳至郡三井保靈岩山興德寺什物 徳岳 (花押)

第十卷目行持本未納卷ヲ取覺此書□之数ニハ壹卷之善用也

正法眼蔵七十五冊並伝光録五冊、秘録一冊、

総数八十一冊也。興徳二代萬松開山哲図和尚御遺物

盡未來際靈岩室中容易仁不可出也

其後龍門寺常住贈置之

②永光寺本『伝光録』

『伝光録』五卷の調査及び撮影。本書は、正徳三年（一七一三）、雪溪安宅が書写したものである。

この写本は、江戸中期のものであるが、近江・清涼寺の仏洲仙英（一七九四～一八六四）が、安政四年（一八五七）に開板（同六年再版）した、所謂仙英本『伝光録』の校訂本である。そのため、現在の本山版（大内本）を底本を知る手がかりとして大変重要な写本である。

仙英本の凡例に以下の様に記される。

一、余曾テ加州大乘、能州洞谷、両古刹秘在ノ本ヲ懇請シ、及ビ諸方ノ古刹或ハ名徳書写ノ数本ヲ得テ、之ヲ校讎スルニ差異マチマチ。只一二ノ三家ノミニアラズ。此ニ於テ之ニ従事スルコト殆ト十有餘年。然ルニ其後住持事繁ク繕写ニ暇ナキコト又二十年。誠に慊慊タリ。今隠栖ニ泊デ又三周。余遂行校正シテ漸ク完璧ヲ得タリ。

一、大乘ノ秘本ハ全部二冊ナリ。上巻ト下巻ト手跡異ナレリ。洞谷ノ秘本ハ原本焼失シ、今ハ他本ヲ写シテ秘蔵スト云ヘリ。全部五冊ナリ。此他諸家ノ写本概ネ五冊ナリ。今刻ノ以テ二冊トナス者ハ、大乘秘在ノ古ヲ存シ、且ツ冊数多キハ欠ケ易キヲ恐レテナリ。

以上でも明らかなように、仙英が底本としたのは、大乘寺本と永光寺本であることは疑いない。こうした諸本の収集が今後の作業に欠かせないものと考ええる。

おわりに

以上のように、『伝光録』の写本史料に触れることにより多くの事実を確認することができた。今後、本研究会として必須というべき『伝光録』最古の写本、乾坤院本『伝光録』の閲覧・撮影も大きな課題である。

さらに、現存する『伝光録』の諸本に関して、データ収集を継続して行いたいと考えている。